アンコール遺跡の保存をめぐって

――人材養成と環境問題――

石澤良昭　上智大学学長

上智大学アンコール遺跡国際調査団（以下調査団）は、内戦中の一九八〇年からカンボジアに入り、アンコール遺跡の保存修復・調査を実施してきた。

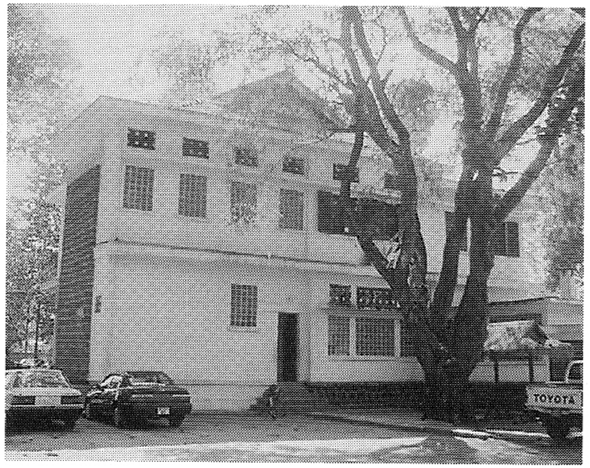
「遺跡（文化）・村落（人間）・森林（自然）」を三位一体と考え、遺跡の保存・修復活動を通じて地元に溶け込み、カンボジアの自立支援を人づくり（人材養成）プロジェクトを介して実施してきた。既に二十年にわたり続けている。

一口にアンコール遺跡と言うが、厳密に言えば一九九二年に世界遺産に登録された遺跡群であり、大小九十九カ所の遺跡が東京二十三区ほどの地域に分散している。この地域には二十四カ村約二万三千人が住み、農業で生計を立てている。

調査団は遺跡の保存修復を実施する中で、将来の遺跡保存官のため王立芸術大学の考古・建築両学部の卒業生・学生の研修を行ない、優秀な研修生を日本の大学院へ進学させ、博士号を取得させている。二〇〇四年現在四名が博士号を取得してカンボジアへ戻り、政府機関の要職に就いている。

私たちはカンボジアには学ぶべき「知」の遺産があり、その上で日本の「知」を語るという姿勢を貫いてきた。それがカンボジアの人たちの信用度（クレディビリティ）を高めてきたと思われる。

一九九二年世界遺産に登録されて以来、アンコール遺跡群周辺の環境劣化が急速に進んでいる。アンコール遺跡群を訪れる観光客は、一九九五年には五千五百人であったのが二〇〇三年には四十八万二千人に膨れ上がった。地元のカンボジア人観光客を加えると五十五万人になり、十年も経たないうちに百倍にも増えている。そして二〇〇五年には百万人を突破するという。このうち日本人観光客は二割強であるという。



1992年創設のカンボジア政府アプサラ機構（アンコール地域遺跡整備機構）本部（カンボジア・シェムリアップ市）
<以下すべて筆者撮影>

そしてこの観光客の急増に伴なう膨大なゴミ、遺跡内を走る車輌による大気汚染、河川の水質悪化、ホテル建設に伴なう自然林破壊、歴史景観の消滅など、遺跡周辺の環境の劣化が進んでいる。ホテルの数は一九九五年の十五から二〇〇三年には六十

五に増設された。現在建設中のホテルを含めると九十二となり、部屋数にすると七千四百室にのぼるという。それに三十名以下の安価なゲストハウスが百三十一あり、いつも満室であるという（二〇〇四年シェムリアップ州観光局調査）。

確かに観光収入はカンボジアの貴重な外貨獲得につながっている。同時にカンボジアの政治的安定を見せる国際ショーウィンドウでもある。アンコール・ワットのお膝元のシェムリアップの町は、観光バブルに沸き立っている。これに対して遺跡を管理するアプサラ機構（APSARA：アンコール地域遺跡整備機構）は遺跡内に駐車場を増設し、十ヵ所のトイレ、バイパス道路を追っているが、追いつかない現状である。また急づくりの施設整備には巨木の伐採が伴ない、かつての森と遺跡という歴史景観も変わってきた。

アプサラ機構は直属の環境局を新設し、二〇〇三年五月からグローバル・スタンダードである「ISO14001」（環境マネージメント）」の導入に向け、職員・技官などの環境リーダー教育を開始した。日本の環境問題に詳しい日本品質保証機構、国際規格研究所、品質保証総合研究所の三機関が研究員を派遣し、この環境人材教育を手伝っている。遅まきながらその事例を紹介いたしたい。

まずアプサラ機構の職員が直接遺跡内の売店や屋台に出かけ、ゴミの散乱状況を調査し、民間のゴミ収集会社に収集を委託した。水質調査や大気調査にも参加している。また各村へ出かけ、パゴダの僧侶や村長らと懇談し、ゴミの減量およびゴミ箱の設置を求めている。とにかく時間と忍耐力の要る説得であり、村人の中にはなぜゴミが問題なのかと激しく言いたてる人がいるという。

上智大学アンコール・ワット西参道修復現場。約60名のカンボジア人石工が働いている。「カンボジア人によるカンボジアの文化遺産」を目指している<2005年2月>

アンコール・ワット地域の小学校教員に対する環境教育の導入説明会。アプサラ機構の担当者がゴミ対策について説明<カンボジア・シェムリアップ郡クラヴァン小学校、2004年7月>

クラヴァン小学校高学年生徒による花壇づくり。同小学校の美化委員会の生徒たち<2004年6月>

また職員は遺跡内の北スラスラン村とクラヴァン村の二小学校の校長と相談し、校内にゴミ箱を設置した。生徒が分かるゴミに関する教材を作成し、配布した。

特に四年生から約八十名の生徒たちを選び、課外授業として校内のゴミをどのようにして減らすかというコンクールを実施した。八名ずつのグループを作り、ゴミの状況を調査した上で二週間ゴミ削減計画を立てた。ゴミの減量やゴミ箱に捨てる

ことを奨励するポスターを全学年の教室に貼り出した。その結果、ようやく学内のゴミはゴミ箱に集められるようになった。家ではこのゴミをなくす運動の話が話題となったという。現在はこうしたゴミ教育をカリキュラムの中に入れていくか、またどのように地域住民をこの運動に巻き込んでいくか検討されている。このように、実験的であるが小さな試みを重ねている。

遺跡内のゴミは清掃会社に委託している。市内から十三キロ離れたロリュオ郡のゴミ捨て場に捨てられている。ゴミ捨て場では生ゴミが腐敗し、悪臭を放ち、うずたかくゴミ山が積まれている。

ゴミ対策を含めてアンコール地域全体の詳細な「環境整備マスタープラン」作成と緊急実施計画が急務である。そしてこの環境マスタープラン実施の担い手は、「ISO14001」で訓練された環境リーダーである。ISO14001 認証取得で「遺跡、村落、森林」が守られることとなる。公害や環境問題に苦しんできた日本のささやかな国際貢献となる。私たちが手伝っているISOプログラムは民間レベルの国際貢献であり、巨額の予算が必要でないことも付け加えておく。

多くの観光客はアンコール文明の結晶である大寺院をつぶさに見ると同時に、遺跡全体の環境に配慮しながら保全に尽力しているカンボジア人に敬意を払うようになるだろう。それが村人の誇りとアイデンティティを盛り上げていくであろう。

（いしざわ　よしあき）

（「２１世紀フォーラム」No.97、2005.3.11）